

戦後の佐多稲子

——内なる戦争責任の凝視（その1）

長谷川 啓

新たな世紀に入ったにもかかわらず、戦争がつづいている。それほどか、一昨年の九・一一事件を境に、アメリカによるアフガニスタン・イラク攻撃へと、世界はいまや戦火の拡大へと突き進んでいる。日本国内においても、戦争準備のための法案が整備されつつあるが、このような中において、一五年戦争下の研究が急速に進展を示し始めている。すでにフェミニズム運動でも、女たちの今を問う会から『銃後史ノート』シリーズが刊行されてきたが、近年では「女性・戦争・人権」学会も設立した。女性文学研究の側からは「戦時下の女性文学——女自らが問う戦争責任」のシンポジウムを開催し、入手困難だった当時の作品の復刻版（『戦時下』の女性文学）全一八巻を刊行、さらに現在『女たちの戦争責任』という評論集を刊行予定である。

このような状況下において、戦争中の佐多稲子にこだ

わりつづけてきたもの⁽¹⁾の責任として、長年の宿題である、戦後佐多稲子が自らの戦争責任をどのように見つめていったのかを、検討してみたいと思う。

日本で戦争に協力した、あるいはせざるをえなかった作家はほとんどであったにもかかわらず、戦後になって反戦と平和の民主主義の思潮の中にすぐさま転換し、かつての自らの言動を問うた作家はきわめて少ない。殊に女性には、庶民同様被害者として位置づけられてきたため、自己の内外ともに、戦争責任を追及したり、される機会も少なかったからであろう。佐多稲子は、戦後の出発から生涯をかけて、戦争責任について真摯に内部告発しつづけた、数少ない作家の一人である。戦前に、日本の国家権力やその帝国主義戦争に抗したプロレタリア運動に献身したり、戦後の民主主義運動にも参入して、身をもって権力と闘った一人であったために、かえって戦争中

の言動を問われることが多かったからでもあろう。しかし、その自らを問う営為は、彼女を鍛え、戦後の佐多稲子の思想の中核を形成していくばかりか、日本人の責任として、再び戦争を開始した二十一世紀への提言ともなる地平へと進み出ていくものであった。

1

佐多稲子の戦後の内部告発の検討に入る前に、まず、戦争中の屈折のありようを概略しておく、ほぼ三段階いや、四段階といってもいい地すべり状態を起こしていると考えられる。最初の段階は日中戦争が開始して一年近く経った一九三八（昭和一三）年の夏頃から秋にかけてで、出征兵士に「感謝」し遺族の悲しみに同情するあまりに、たとえば女性勤労者たちの生も戦線で働く兵士の労苦に結びつけて考えなければならぬことを説くなど、戦時体制への揺らぎを見せ始めるエッセイ「平和産業から戦時体制へ」を発表し、私生活においては、田村俊子と不倫の恋に陥った夫・窪川鶴次郎との妥協が始まった時期である。二段階目は、「紀元二千六百年」にあたる一九四〇年で、働く女性の覚悟を「国家の運命との関連」で考えることを語り、戦時体制へのさらなる動揺

を示したエッセイ「続・新年の言葉——昭和十五年を迎えて——」を発表して、最初の植民地旅行（朝鮮）にも出かけている。問題の決定的変容が三段階目である。佐多稲子は、朝鮮へ二度、「満州」へ三度、台湾・中国・南方へは一度ずつと、合わせて八回ほど日本の植民地を旅しており、その中でも「満州」（中国東北地方）・中国・南方へは、一度ずつだが戦地慰問に出かけている。

四一年九月に朝日新聞社による小説家慰問部隊の一員として「満州」各地の戦地を慰問し、太平洋戦争開始後の四二年五月から六月にかけて陸軍報道部の徳憑による新潮社の『日の出』特派員として中国（中支）各地を戦地慰問、さらに同年一〇月末から翌年五月上旬にかけて陸軍省報道部の南方派遣者（軍嘱託）としてマレー・スマトラなど南方を慰問しているのである。

三段階目の変容、変節点は、二度目の戦地慰問にあたる中国行きで、戦争に協力的な文章を書くに至る決定的な作用をした体験となるものであった。その現地報告「最前線の人々」では、中国侵略の先兵としてではなく、「決死隊」覚悟の労苦を負わされた被害者としての兵士にのみ向き合い、心を動かされ、感傷的に戦争を受け止めてしまっている。同じく機上ルポした「作戦地区の

空」にしても、戦闘意気に燃え、「適地の道」を進軍する日本兵の様子に感謝・感涙しているのである。自動車隊に参加した記録「戦場に見出す人情の美しさ」というタイトルは、佐多稲子のこれらの文章の特徴を実によく表しているが、まさにこのような観点から戦場を見、兵隊を見ているわけで、人間を殺戮し合う実践のすさまじさも軍隊生活の現実も捨象した、女が見た戦地慰問の範囲を出ていない。しかし、こうしたきれいな報告がかえって銃後の女たちを鼓舞し動員する効果を果たしたのであろう。そのいっぽう、日本軍に捕らえられた抗日の中国女性について書いた「中支で逢った二人の女性」では、日本の兵士たちの労苦に涙する文章とはうってかわって、俘虜たちの屈辱的な立場を痛みをもって見ていないばかりか、侵略国としての苦渋も滲み出ていない筆致になってしまっている。

そして、中国での戦いの意義を再認識させるべく積極的な役割を果たし、佐多稲子の中国慰問記中もっとも戦争協力的な文章が「中支の兵隊さん達」である。「支那全土との全き提携がなるまで国民政府を援け、抗日勢力を排除しつゝ民衆を引つけてゆくためには、日本の私たちの大きな覚悟と実行が必要であらう」といった、かつ

て革命運動で闘っていたとは思えぬような発言をせざるをえなくなっている。また、兵士を支える力は日本国内の者がもっていないなければならないとか、「女手は希望の門」の章での、「女性たちも、今後は心と目を内地からもっと広げて、一人々々が一騎打ちの覚悟で立てるつもりにならなければならない」、「内地の困苦などは生優しい。戦地の苦勞をしのんで銃後に励む、といふ覚悟」で「今後の女性たちの幸福は、もうこれまでのやうに、内地にあつて平穩に過ごすといふことのなかだけ限つてゐられないのではないか」と、啓蒙するに至っている。「小さな感想」中の「婦人の能力の活用」に至っては、女性解放への願望は、戦争を支えるイデオロギーへと変質しかかっているようにさえみえる。

今あげたエッセイはすべて一九四二年一二月発行の『続・女性の言葉』所収のものだが、小説においても決定的な変節がみられるのが、中国への戦地慰問以後である。兵隊賛美の銃後小説「気づかざりき」、戦地の兵士がすべてに優先して銃後の迷いは払拭されてしまう「南京の驟雨」など、前記した「中支の兵隊さん達」における銃後の女たちへの啓蒙的発言がストレートに作品化されているといえよう。

四段階目は、南方行き（おそらく「行きずりの恋」が生じた時期）以降であるが、南方の現地報告「マライの旅」では、日本語と日本精神の指導監督に打ち込む日本兵を描きながら、教育熱心であればあるほど侵略化に加担するという矛盾については触れていないばかりか、日本兵の熱意に心を動かされている筆致になっている。日本語教育は、日本の占領地教育政策の中でもっとも強力に実施されたもので、日本語を大東亜の共通語にして共栄圏諸民族の思想的統一を図ろうとしたが、その意図は現地住民には受け入れられず、むしろ言語教育の強制として受け取られた、という事実を佐多稲子は看破していたかどうか。また、この南方行きから生まれた「挿話」では、インドネシアの女性と結婚しながらも、妻の皮膚の黒さを蔑視する、現地の日本男性の立場に寄り添って描き、「髪の嘆き」でも、当時の敵国オランダの混血児の娘が日本鼻頂になっていくという、日本の植民地における皇民化政策に添った小説になっている。

これらの作品を発表した四三年の八月には、「決戦精神の昂揚、米英文化の撃滅、共栄圏文化の確立」を議題とする第二回大東亜文学者大会に、佐多稲子は議員として出席しているが、以後いつそう拍車がかかり、彼女が

書いたものの中でも最も戦争協力的な文章、銃後の戦いを伝える「戦ふ鉛山の人々を訪ねて」「空を征く心——航空記念日に因んで——」を発表するに至っている。前者は、あたかも第二回大会の「決戦精神の昂揚」を受けついだかのような、「尖兵、産業戦士たち」の国家への滅私奉公ぶりを、感激的に伝えたルポルターージュであり、後者は、戦闘機の部品を製造する若い女性たちをルポし、「敵国の作業に負けてはならぬと、思はれてくる」など、ナショナルな心情への傾斜さえみられなくもない記録である。さらに後者では、銃後の最前線の担い手として使命感と責任をもって近代兵器の制作にあたる女工員「農村のもんべ女性」たちに、働く女性としての「新しい感情」を見い出して感動し、男以上の女の能力への確信と、その能力が飛行機を媒体としてまさに戦闘力になることに言及している。近代工場で「機械を操作する婦人の姿も、日本の偉力のひとつになる」ことを声高に示唆し、佐多稲子自身の女の解放への欲求が、国家総動員法下に巻き込まれていることを伝えるとともに、戦時体制が女性解放をも有効利用していた事実が判然とする。そればかりではない。飛行機に志願した一人息子を持つ夫婦が、「空の戦ひに命を捧げる我が子の勇ましき」に「ひとし

「お可愛さが増」すというエピソードまで書き、女性たちの「空を征く心」は「愛な子を空に捧げる母」や飛行機制作の女たちの涙や汗をも結集するであろうと結んでおり、もはや戦意昂揚のなにもでもない文章になっているのである。

そして、これまでの文章の集大成ともいうべき長編小説が『若き妻たち』である。迷える若き妻たちが改心して、戦地の夫を最優先に、戦時生活にふさわしい心構えを持つまでを描いた銃後小説で、夫の出征後舅や姑を支えて明るく健気に生きる妻や、子供を持つことを女の「勲章」として朗らかに立ち働く妻が、銃後の妻の鑑として描くに至っている。「日本女性の美德」は「いったん夫を持った上は、その夫の言に従って、家を守ってゆくといふのが第一義」などと反フェミニズム的なことまで肯定するかのような書き方をし、日本女性の南方へ進出して働くことが「立派にお国のお役に立つ」ことを説きつつ、その日本女性の美德が「戦争で英国に勝った日本人の、自づから出来てゆく誇らしい心構へで、それは戦争の建設にたゞさはるものの、ひとつの戦ひでもあ」ることを、迷える妻に自覚させるに至っているのである。男たちについても、青年の、国を思つて燃えたち「立派

に死ぬ覚悟が出来てゐる」気持を書き、銃後の老人には、南洋や「支那」とか何処にでも行く経験はたいしたもの、「日本人は、この戦争でぐうつと変る」と語り、隣近所の息子の「英霊」にも「御国のためだから、親御さんも本望だらう」と言わせている。隣組組織についても「ありがたい」連帯感の側面のみ強調し、南方の戦地の「意気軒昂」な看護婦たちの生活を伝えて「内地の女の生活」の方がまだ「つまらな」いことを銃後の妻に思わせたり、「敵米英」なる語も登場人物に言わせるなど、太平洋戦争下における拳国一致の戦時共同体を、結構活気のあるその生活や人々を描いている。作者はそのような戦時下に生きる人々に一体化し、彼らの生活意識や戦争意識の代弁者として筆をすすめているようにさえみえる。あたかも、大東亜共栄圏、欲しがりません勝つまでは、産めよ増やせよ、贅沢品の禁止法などの思想や標語や政策がほとんどうかかえるような戦時下の世相を映し出しているといえよう。

ところで、一九四四年六月に刊行された『若き妻たち』と同じ戦時共同体意識の中から生まれたものと思われるのが、四月と九月に『文学報国』に載った「勤労女性への希望——安易な自己満足は禁物」と「わが決戦生

活——衣・食・住」である。前者では、「国家が生産に総てを動員するといふことは日本国民の当面してゐる重大な事柄で、其処から決して傲つた勤労観が出て来てはならない筈です、殊に若い女性達は女性の生活に今迄なかつた期待を国家から担つてゐる訳で、之は女性生活に大きなものを齎すことでもあります」と述べ、結婚問題について「私は支那、満州、南方に行き、沢山の若い兵隊さんが自分の守つてゐる陣地で死ぬのだといふ覚悟をもつてゐ、そしてまた結婚に対しては青年としての希望を胸にもつて戦つてゐる姿を本当の人間の姿（傍点——長谷川）として見て来ましたが、その時つくづく内地の女性達だけが結婚難をいつてゐることは戦地の兵隊さんに対し相済まないことゝ思ひました」と語っており、これらの主張はまさしく「若き妻たち」の世界を支える思想といえよう。女性の活躍への期待と、兵隊への「相済まない」気持からくる兵士最優先の考えは、あらためて、佐多稲子が戦争の内側に入っていく、つまり戦争に協力的な表現の二大要素であることが判然としよう。死を覚悟しつつも結婚にも希望をもつて戦つてゐる兵士たちの姿を、「本当の人間の姿」として捉えて感動し同情してしまい、そのような矛盾に引き裂かれてゐる兵士の現状

を問わないばかりか（勿論あからさまに問えない時代ではあつたのだが）、結婚難を言う女たちが置かれた現実を問うよりも前に、日本国内で安住してゐる女たちだけが結婚難を言うのは、前線で死を賭けて戦う兵士に「相済まないこと」と思つてしまふ発想。いまやフェミニズムにも反し、日本帝国の侵略戦争の本質を見失つてゐるとしか言いようがない見解の記述に終わつてゐる。そのフェミニズムの問題にしても、「傲つた勤労観が出てきてはならない」とか「女性の生活に今迄なかつた期待を国家から担つてゐる」などと、国家優先の政策に同調し、戦時体制に都合のいい女性解放観に陥つてしまつてゐる。平塚らいてうや市川房枝らフェミニストにもみられるように、当時のフェミニズムと戦争は矛盾するものではなく、というよりも戦争はフェミニズム思想をも利用して大いに女性の能力を活用させ、女性の力を家庭の中から外へ引き出したが、佐多稲子もまたこの状況に便乗してゐたと思われる。

さらにその後者の「わが決戦生活」からは、溢れる生活感覚や適応性やたくましきなど生活派的体質が、戦時下の耐乏生活の中で引き出されてゐることが見受けられる。そして、「工場は戦場——征空義勇工作隊と語る」

では、征空義勇工作隊の決死の覚悟の「心意気」「戦友愛」「工員魂」を美しく感じたり、「『我も死なずば』と泣いて誓ふ特攻隊の勇士たちの、澄んだ神のごとき精神」といった表現など、純心で献身的な滅私奉公ぶりの感動がいかに時局便乗への癖になっていたかがうかがえる。それは、プロレタリア運動時代の美しき献身のモラルとどこかで通底しているが、善意というものも国家の侵略性を支えていたのだと日高六郎も言っているけれども、佐多稲子もまた、善意の發揮が戦争協力につながったといえよう。「戦時朗々——初の挨拶」では、そこそプロレタリア運動感覚の変形ともいえる庶民の浮沈とともにするとといった、いわば戦時下の市井の人々への連帯感がみられるが、それは結局、〈日本国民〉との戦時共同体意識につながるものでもあったろう。

このように、戦争による人々の悲劇をみつめた日中戦争期作品とは違って、太平洋戦争期の中国慰問後からは、戦争に協力的な一種高揚感のある作品さえ書くに至るといふ変貌を示しているが、この背後には、先述した理由の他に、以下のようなこともあったのではなからうか。つまり太平洋戦争以降は、侵略戦争から対欧米戦争になったような側面もあったために、明治以来の欧米へのコ

ンプレックスや恨みが解消される気持で知識人を含む多くの男たちは戦争賛同へと変化していくが、そうした状況に、稲子もふくめて女たちもまた乗せられていったことが考えられる。身近なところでいえば、夫の窪川鶴次郎もまた戦争に協力的な評論を書き出しているし、南方行きから戦後まもなくまで恋人であったかと思われる男性は戦争中に活躍したジャーナリストであり、翼賛運動宣伝本部の委員としてその宣伝を通し戦争に協力せざるをえなかったらうから、当然彼らの影響があったに違いない。

しかしながら、全面的・盲目的に戦争の時代に同化していたのではなからう。南方や台湾の旅を描いた小説、四三年七月発表の「挿話」、九月から翌年の一月に発表された「台湾の旅」などは、今あげてきた高揚した文章とは違い、いささか自棄的で不敵で虚無的な心情さえ揺曳している。この背後には、日本の戦線の驍りや、ままたらぬ稲子自身の不倫の恋がおそらくあり、一八年の終わりか翌年の初めにはこの恋との関連が再々度満州へ旅立っているし、さらに崩壊しつつある夫婦関係の問題もあつたらう。前述した「若き妻たち」にしても、一人の傍観者も許さぬ戦時生活を見据えようとする観察意識が

うかがえる。南方への戦地慰問における視察手帖の中には、侵略国オランダや日本に対するイスラム教徒の反逆行動や反抗心が度々記載されているが、ここには稲子の共感、戦時体制に対する彼女自身のそれを重ねているのではなくるか。とすると、戦争に協力的な言動も面従腹背の姿勢といえるかもしれない。といったところで、佐多稲子の戦時下の行動と表現は戦争協力以外の何者でもなく、文学報国会の第二回大東亜文学者大会では代議員となつて、先端に躍り出てしまつていたのである。では何故そのような屈折に至つたのか、次にその原因について簡単に触れておこう。

佐多稲子の揺らぎが見え始めるのは、日中戦争期からであることを先に指摘したが、その当時の彼女の意識について触れておくと、夫婦関係の退廃に黒ずむ意識と女性解放へむかつて羽撃く意識とが二重構造になつていて、前者が低音部で後者が高音部とすれば、低音部からは自壊作用を生じはじめ、高音部からは国家総動員法下の女性の能力活用政策にのせられていき、しだいに戦時体制への抵抗力・批判精神を失つていったのだと思われる。それに拍車をかけたのが、戦争の犠牲者としての兵士や庶民の悲劇・不幸への同情であり、太平洋戦争期になる

と中国への戦地慰問によつてその同情が戦争への内側に入つて行く決定的な作用を果たすことになる。さらに太平洋戦争下では、戦後のところで再度取り上げるが、大衆からの孤立感という問題も加わってくるが、これら三点、女性解放への願望、兵士や庶民の悲劇への同情、大衆からの孤立感が、戦争協力的な言動をとらざるをえなかつた大きな原因であろう。

女の解放への願望・能力の拡充という問題との関連で補足しておけば、総力戦時代に作家としての自己実現を果たし、作家欲を追求していくことは、戦争協力につながる結果を招来し、戦時下の女性作家の多くが辿つた道であつたが、佐多稲子もまたその一人であつた。戦後の自伝小説「ある女の戸籍」で「妻の位置にこけつまろびつしながらがむしやらに杵を突き破つてきた」と語つているけれども、ことに〈昭和十年代〉の佐多稲子の生を象徴的に示すものであり、「妻の位置」と格闘しながらがむしやらに作家としての伸展・自己実現を押し進めていくうちに、はからずも戦争に協力する結果になつてしまつたところがある。三度にわたる戦地慰問行きの動機にしても、よく指摘される経済的な問題以上に、大衆からの孤立感や、「民衆の悲哀の外にはいたくない」（自

分について」というプロレタリア運動意識の残存、そしてこの作家欲があげられる。

もっとも、佐多稲子がこのような言動に至った一番の原因は、思想弾圧・言論統制の厳しい戦時下状況であり、その中で生活し生きざるをえなかった、やむを得ない身の処し方であったことはいうまでもない。したがって、彼女に決定的な影響を与えた社会主義思想を捨てたわけでもなかったろうし、心の底では戦争に反対でもあったろう。佐多稲子の本音の部分がはからずも滲み出ている「台湾の旅」の中に、彼女の偽装意識がみられることを、

谷口絹枝は指摘⁽³⁾してもいる。(二章以降、戦後の佐多稲子の内なる戦争責任については、次号に続く)

注(1) この考察については、『佐多稲子論』(オリジン出版センター、平4・7)に 所収。

(2) 拙稿「旅の記録・写真が語る戦地慰問——佐多稲子の未発表資料をめぐって」(『城西文学』第26号、城西大学女子短期大学部文学会、平13・3)で言及。

(3) 『方位』第23号(熊本近代文学研究会、平14・12)で言及。